新刊紹介

Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary

2 vols. by F. Edgerton 1953.

(21.5×28cm, vol. I 269p. vol. II 627p.)

梵語系諸言語のさまざまな形態についての言語學的・文法學的知識を殆どもち合はさぬ筆者にとつて、此の種の書物の十全な紹介批評は及びもつかぬことなので、主として、斯書の著者自身が、そのはしがき及び序論において述べてゐる所論の大要を摘記することによつて、その責をふさぐことを許していたゞきたい。

こゝに Buddhist Hybrid Sanskrit(混淆佛教梵語、以下BHSと略する)といはれるのは、學者らによつて、或ひは Gāthā dialect とも、Mixed Sanskrit (Gemischtes Skt.) とも、Buddhist Skt. とも呼ばれるものである。それはすなはち、インド語學者の所謂「中期インドアリアン語」(著者の用語に從へば Middle Indics)——卽ち廣義のプラークリット——の一形態であつて、北傳佛教聖典の多くがそれによつて書かれてゐるものである。著者の見解によれば、佛教々團は、その最古の時代においてすらも、唯一つの言語をしか用ひなかつたかどうか、甚だ疑はしい。初期佛教徒は、傳統的に、その教團用語について、きはめて寬容で自由な考へ方をもつてゐたから、おそらく、僧伽の形成されたそれぞれの地方において、それぞれの用語が採り用ひられたのであり、マーガディー Māgadhī などもその一つに過ぎぬと考えられる。パーリ語も、BHSも、他のプラークリット(例へば于闐 Khotan 附近で發見された法句經の斷片に用ひられてゐる如き)も、それぞれ、さういふもろ〳〵の Middle Indic dialects の中の一つが、その基となつてゐるのである。

そのやうにBHSは、本來、一個の古い Middle Indic を基としてゐるが、パーリ語やその他のプラークリットにおいても見られる如く、餘他の Middle Indic dialects から借りた樣々な形を含んで、混淆した態を以つて成立した。殊に、この語のもつ最もいちじるしい特徵は、廣範圍に梵語 (classical Skt. 著者の用語によれば standard Skt.) の影響を受け、梵語の方向へ强くモディファイされてゐることである。それは既にその最も初期のものにおいても見出され、時代の下ると共に次第に顯著にあらはれてゐる。BHSによる最古の作品は、おそらく基督紀元を一世紀以上遡るであらうから、このことは、北印佛教徒の中に、きはめて早い時代から、既に、それぞれの地方のプラークリットに依るという佛教の教團用語の傳統を棄てゝ、典雅で洗練された婆羅門の言葉の魅力に屈したもののあつたことを、示すことになるけれども、それでもなほ、聖典を梵語に飜譯してしまふといふことは行はれなかつた。殊に、初期のものにおいては、いたるところ、その基となつた Middle Indic の形が保たれ、「梵語化(サンスクリタイゼイション)」の現象は部分的に見出されるのみである。が、時代が下ると共に、「梵語化」の現象は、一般的に言つて、增大する方向に進む。それは、同一テキストの異本對照や、相互

に異るテキスト中に存する同一文脈の對比などによつて、明瞭に知ることができる。一般に、韻律の部分を梵語化することは困難なわけであるが、それすらこのBHSの梵語化の傾向に對する絶對の障碍とはなり得なかつた。たゞ、散文の部分が、形態學的(モーフオロジカル)にいつても、音韻學的(フオノロジカル)にいつても、(全く、ではないが)殆ど、梵語化されてゐるのに比べて、韻文の部分は、一般的に言つて、BHSとしてより純粹な形をもつて居り、原の Middle Indic form をより多く殘してゐるといつてよい。そしてしかも、語彙から見れば、散文の部分に於ても、韻文の部分と同樣に、標準梵語には決して見出されない Middle Indic なものを多く含んでゐるのである。

現代に至つてもなほ、學者の多くが、BHSを單に「梵語」と呼んでゐる。もとより、マハーヴスツやラリタヴィスタラの「梵語」は梵語ではあつても、一種特別な梵語であるといふことは誰にも理解されてゐるが、しかし、例へばマハーバーラタの梵語(インド語學者の所謂 Epic Skt.)が、Middle Indic なものを含む爲に「一種特別な梵語」といはれる、それと同樣な意味で、BHSを一種特別な「梵語」であるといふわけには行かないのである。BHSはどこまでも "a real language, not a modification or corruption of any other dialect or record, and as in its lexicon as it has been shown to be in its grammar" なのである。

以上のやうな考察の上に立つて、著者は、學界最初の試みたるこのBHSの文法及び辭書述作の仕事を、次のやうな手續きを以て遂行した。すなはち、既出版のできるだけ多くのテキストから、標準梵語のあらゆる形・標準梵語におけると同義に用ひられてゐるあらゆる語を除去することを原則として材料を蒐集し、それに分類と組織づけとを與へることによつて、この文法(第一卷)と辭書(第二卷)とに結實せしめた。(從つて、著者自身も言つてゐるやうに、この文法・辭書を用ひて、BHSによつて書かれたテキストを讀解しようと試みる者は、別に標準梵語の文法及び辭書を座右に置く必要があるわけである。)しかし、標準梵語を除外するといふ原則も、實際に當つての適用は容易でない。そこで、著者は、疑はしい場合には、一應その理由を示しつゝ、之を採ることとした。

このやうな行き方を採つたのであるから、この辭書は、Buddhist Hybrid Skt. Dict. と銘うちながら、例へば、nirvāṇa といふ項目すらその中に見出すことが出來ない。しかし之は——著者自身の斷り書きによれば——この著をなすに當つて著者が用ひた既刊のBHSテキストの中のいづこにも、ベートリンクの梵語辭書に見出される語義の範圍に收まらぬ樣な意味で、この語が用ひられてゐる箇處を見出すことができなかつたからなのであつて、標準梵語によつてかゝれた——從つてこの場合著者の用ひなかつた——佛教論書のテキストの中で、この語が、ベートリンクの辭書に理解する意味と非常に異つた意味で、用ひられてゐる、といふことを否定するものではない。たゞBHSを用ひた北方印度佛教徒は、このnirvāṇa の語を、婆羅門教徒たる彼らの隣人が知らないやうな意味には、決して使用しなかつたのだ、といふのが著者の

意見である。

著者のこのやうな plan と method とが果して理論的に透徹してゐるかどうか、そしてそれがこの書の隅々にまでおし及ぼされてゐるかどうかは、今後の識者の批判に俟つべきであらうが、ともかくこの一部兩册の大著は、BHSを組織的に學的に、取扱つた最初の業績として、印度學者・言語學者・佛教研究者らに多くの利便を提供するであらう。

この辭書は、また、一種の佛教術語辭典としても、初歩の佛教研究者にとつてまことに有效な役目を果すやうに思はれる。一、二の例を擧げれば、kṣānti（忍）といふ語は、ベートリンクの辭書もモニエルのそれも、忍耐・思ひ遣り・辛抱强く待つこと、などといふ意味しか載せてゐない。所が、この辭書では、intellectual receptivity; the being ready in advance to accept knowledge といふ解を與へ、更にそれを說明して a preliminary stage leading to jñāna but distinguished from jñāna by the fact that it is still characterized by doubt と言ひ、俱舍論の賢聖品などを參照すべき旨を指示してゐるし、またその項目の下には anutpattika-dharma-kṣānti（無生法忍）といふやうな熟語も出されてゐる。また saṁvṛti（世俗）といふ語なども、モニエルの說明は、closure, covering, concealing, hypocrisy, obstruction などとあるのみであり、ベートリンクも、せいぜい Ueber die Bed. des Wortes bei den Buddhisten S. Wassiljew, Der Buddh. S. 321. fgg. と註記してゐるに過ぎないが、この辭書では convention, general (popular) acceptance, 'common sense', limited truth or knowledge (often contrast with paramārtha) とあり、更に西藏語では普通 kun rdsob（=altogether void）で譯すことまで說明してゐる。

文法は、(一)序論、(二)音韻論にはじまり、動詞語形一覽表に至る四十三章から成る詳細綿密なものである。インデックスは之を缺いてゐるが、著者自身も述べてゐる如く、卷頭に附した細かな內容目次がかなりにその用を便じるであらう。

尙、この書に附屬するものとして Buddhist Hybrid Sanskrit Reader 一卷が刊行されてゐる。マハーヴスツ・ラリタヴィスタラ・マハーパリニルヴーナスートラ・ウダーナヴルガ・サツダルマプンダリーカなどから、少しづつ要文を抽き出して、編輯したもので、初學者の學習に便なるものであらう。詳細なヴァリアントを脚註にして附してゐる。

著者フランクリン・エジャートン氏はエール大學の梵語及び比較言語學の教授であり、この著作は教授の二十年に近い研究と多くの學者の協力とによつて得られた成果である。

なほ、著者より山口教授へ一本を贈呈されたことによつて、斯書は逸早く我が學界へ齎されることになつたのであるが、それは、エール大學のラーデル教授の配慮による所である。（櫻部建）

◇物と心

稻葉 秀賢著

人間とは何であるか、人間はいかに生くべきであるか、との人生的根據追求の主題に關して著者が最近一二年の間に書かれたものゝ中から蒐められたもので、